



# いとすきしまね

第28号 令和元年10月31日

島根県青少年赤十字賛助奉仕団  
日本赤十字社島根県支部内 松江市内中原町40 Tel 0852-21-4237



## JRCと私

副委員長 山岡清志

JRCとの出会いは、昭和62年、出雲市立塩治小学校2年目の時である。当時の校長が、市教研のJRC部の部長であり、昭和63年度に島根県青少年赤十字研究大会発表を塩治小でやるということから、62年度からJRCの担当となった。

早速、その年にいわゆる「御殿場帰り」となった。JRCの「J」のこともわからない私であったため、3泊4日の富士山を仰ぎながらの中央研修では、しっかりと「JRCとはなんぞや」と鍛えられたのである。

この研修はすぐに生かされた。先ずは出雲市のトレセンに、そして県のトレセンに、である。市のトレセンでは、事務局として、V・S黒板の設置から日程、内容（ホーム・ルーム、V・S等）の進め方、最後は弁当の手配まですべてに及んだ。

県のトレセンでは、当然のことながら1日目は「赤十字・青少年赤十字活動について」のレクチャーである。子ども達を飽きさせないように、ということだけを考えていた。

それから退職するまで、約30年間（1回中止：災害が起きたため）1回も休まずに参加した。会場は、今では「サン・レイク」であるが、昭和62年当時

は、三瓶の志学小学校、中学校が会場であった。図書室の本を枕に、支部のあのゴワゴワとした毛布をふとんの代わりとしていた。お風呂は、小学校のプールでのシャワーであった。しかし、食事は良かった。学校の給食室で地域の人が作ってくれたからである。本当においしかったのが思い出される。そして、V・Sやフィールドワークなどもしっかりとできたのである。

県の発表については、委員会活動を中心とした発表であったと記憶している。まずは、すべての委員会を「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」にそれぞれ分け、その狙いに即した委員会活動を行った。また毎月「5」の日には、全校で「ちかいの言葉」を言ってから、「空は世界へ」のバックミュージックでゴミ集め等、自分で考えたV・S活動を行った。

塩治小学校当時のことが中心となつたが、JRCと出合えて本当に良かったと思っている。「気づき・考え・実行する」、この態度目標が、その後の学級経営・学校経営の基となつたことはもちろん、退職後の生き方にも反映されているからである。

以上、巻頭言としてではなく、私の戯れ言として読んでいただければ・・・

## 令和初の総会・研修会 和やかに開催

飯 塚 勝

5月30日、令和初の総会・研修会が団員16名、事務局3名の参加により開催されました。挨拶に続く報告の中で、昨年度のJRC加盟校が190校・園となったとありました。学校数が減る中、20校・園の新規加盟があったことは大変嬉しいことで、特に7幼稚園の新規加盟があったことは、幼児からJRCに触れることが、将来に亘る赤十字への関わりの原体験となってくれればと、期待させるものでした。

協議事項3の「令和元年度賛助奉仕団の活動計画」では、「JRCの普及活動・加盟の促進」「指導者の育成」「団員の研修と親睦」「支部との連携」という4つの柱で協議されました。今後の賛助奉仕団の意義や役割、そして課題を端的に示した柱だと思います。なお、協議の結果、2月開催の指導者講習会への旅費補助の廃止、「いとすぎしまね」発行のための編集委員の設置が決まりました。また、10月には加納美術館への視察研修を計画し

たい旨、委員長より話がありました。多数のご参加があればと思います。

研修会での小林七彩主事による平成30年7月豪雨災害救護活動の報告は、実体験に基づくとても分かりやすいものであると同時に、小林さん自身初の派遣経験で自分に何ができるのかと、真摯に自問自答しながら取り組んでおられた姿が印象的でした。

賛助の会ならではの、コーヒーやお菓子のおもてなしが心に染み、「令和」の名にふさわしく和やかに時が流れた総会・研修会となりました。



## 「島根県青少年赤十字賛助奉仕団 研修会」 講 演

### 「平成30年度7月豪雨災害」における日赤の救護活動

日本赤十字社島根県支部 事業推進課 主事 小林 七彩

西日本を中心に広い範囲で記録的な大雨となり、死者237名、負傷者400名以上、住宅被害は全壊が約6,700棟と大きな被害

をもたらした「平成30年7月豪雨災害」。岡山県や広島県をはじめ、多くの県で被害があり、島根県においても江津市、川本町を中心

に住宅被害が出ました。

この災害に対し、日本赤十字社では全国から救護班を派遣したほか、救援物資の配布、こころのケア班の派遣、赤十字ボランティアの活動、義援金の受付などを行いました。島根県支部では、松江、益田両赤十字病院から計3班の救護班が出動。私は7月20日～23日に、第3班として広島県安芸郡坂町へ出動しました。



私たちの任務は、避難所である坂町立小屋浦小学校の保健室に設置された救護所の運営でした。発災から約3週間が経過していましたが、周辺では、被災者やボランティアの方が泥まみれになりながら暑い日差しの中片付けをし、学校の校庭は廃棄物や土嚢で埋め尽くされ、すぐ近くでは自衛隊や消防による行方不明者の捜索が続いている状況。大雨がもたらす被害の大きさや恐ろしさを目の当たりにしました。



救護所は1日に約40名の方が、熱中症、砂ぼこりによる目や喉の痛み、片付け作業中のケガなどの症状で来られ対応しました。救護所が落ち着いているときには、看護師長や主事が中心となり、避難所内や周辺の家を訪ねて、被災者の方の健康状態や衛生状態の確認なども行いました。

日赤島根県支部に勤めて5年、これが私の初めての救護活動でした。本当に多くのことを学び、様々なことを感じ、考えさせられました。特に、避難所には、保健師会、看護協会、薬剤師会など、日赤の他にも多くの団体が支援に来ていましたが、団体こそ違え、「被災者を助けたい」という強い思いはみな同じ。団体を越えた連携や情報交換を密に行っていくことが、被災者のためになり、よりよい救護活動につながるということを強く実感しました。



また、現地にはボランティアの人方がたくさんおられ、避難所には支援物資がたくさん届き、そして災害を乗り越えようとする被災者の方がおられ・・・人の「つながり」や「あたたかさ」、「強さ」を感じました。赤十字が掲げている「人間を救うのは、人間だ」というスローガン。災害時はもちろん、日頃から、「困っている人に手を差し伸べる」ことのできる人が増えるよう、この言葉を伝え続けていきたいと思います。

# 令和元年度 全国青少年赤十字賛助奉仕団協議会

## 総会・研修会 報告

委員長 広原 啓視

令和元年7月9日（火）、10日（水）の両日、東京都港区の日赤本社で開催された標記の総会・研修会に参加しましたので、その内容についていくつか報告します。

### 1 次年度の総会について

これまでの総会は、日赤本社で開催されていましたが、次年度に限って、次のような理由により福島県で開催されることになりました。

- ①東日本大震災から10年目を迎える福島県の実情を見て、感じて、考えてほしいという、福島県青少年赤十字賛助奉仕団のみなさんの熱い思いがあること
- ②次年度は東京オリンピックのため、東京での宿泊場所を確保するのが困難であること

### 2 分科会（研究会①）

参加者が9つのグループに分かれ、次の課題について話し合いました。

- ①青少年赤十字加盟校の活動充実の支援について
- ②青少年赤十字賛助奉仕団の増員方法について

それぞれの賛助奉仕団の特色ある活動を知ることができ、大いに参考になりました。私たちもこれまでの活動に加え、例えば、いとすぎの育苗や植樹などを通して、指導者協議会のみなさんとの一層の連携を図り、加盟校の活動を支援していくべきだと思って

います。また、広島県の「青少年赤十字賛助ひろしま」には、県教育長の巻頭言が掲載されており、本県でも導入してはどうだろうかと思いました。

### 3 全体会（研究会②）

講演「青少年赤十字と海外支援」

（講師：本社 青少年赤十字係長

宮崎 友紀子 氏）

「1円玉募金を使った海外支援事業」の対象国であるネパールとバヌアツの実情と支援についての詳細な報告がありました。そして、この事業の特徴を再確認することができました。次の2つです。

- ①子どもたちが活動の担い手であること
- ②地域の人たちと一緒にになって、現場に即した活動を考えていること

### 4 ブロック会

第5ブロックの参加者による情報交換等

- ・令和元年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会について

期日：10月10日（木）～11日（金）

会場：ザ・グランドパレス徳島

（徳島市寺島本町1-60-1）

内容：講演、公演、協議、情報交換、視察研修等

### 5 感想等

他県の方々といろいろな情報交換ができ、有意義な会でした。

## 令和初の「全国赤十字大会」

### 新名誉総裁 雅子皇后陛下をお迎えして

松本 淑子

5月以降「令和初の」云々と言われた様々なイベントが開催されてきましたが、中でも「令和初の全国赤十字大会」は特別意義深く、新たな時代の幕開けを感じました。

それまで30年間名誉総裁を務められた美智子上皇后さまから引き継がれ、新名誉総裁となられた雅子皇后陛下をお迎えして、5月22日に行われた今大会に参加させていただきました。

表彰式では雅子皇后陛下より直接、功労者の方々に有功章が授与されました。皇后陛下のにこやかではつらつとした美しいお姿を拝見して、これこそ日本国民が長い間待ち望んでいたお姿だと感激しました。もっとも雅子さまのお帽子が大きく二階後部座席からは直接お顔が見えず、大型スクリーンで拝見しましたが、失礼ながらこの会場で同じ空気を吸っているという満足感に浸っていました。

式典では近衛社長の「令和の時代も世界の赤十字が手を取り合い、ともに歩むことを願う」「今、この

世の中の貧困・孤児・病気を救うために赤十字の存在意義がある」「敵味方の別なく人々の苦痛と戦い、人間が人間らしく生きるために力を貸す」というメッセージを代読で聞きました。

その後、岡山赤十字病院の医師、齋藤博則さんから平成30年7月の豪雨災害での活動、神奈川県赤十字国際奉仕団の田中友美乃さんからユースボランティアとしての活動について発表がありました。赤十字の一員としての自覚と誇りを胸に抱き、明治神宮会館を後にしました。



## 日赤島根県支部赤十字奉仕団委員長協議会 報告

委員長 広原 啓視

令和元年6月20日（木）に日赤島根県支部で開催された標記の協議会の概要を報告します。

### 1 出席者は次の7つの奉仕団の委員長・会長です。

地域赤十字奉仕団、しんじ湖青年赤十字奉仕団、島根大学学生赤十字奉仕団、みづうみ赤十字奉仕団、島根県無線赤十字奉仕団、島根県青少年赤十字賛助奉仕団、島根県青少年赤十字指導者協議会

※ なお、このほかに、松江邦楽赤十字奉仕団と島根県理容赤十字奉仕団があります。

### 2 協議の内容等

開会行事の後、映像「赤十字この1年（2018～

2019）」の視聴。そのあと、各奉仕団が前年度の活動報告と本年度の活動計画を発表し、連携できる活動について意見交換をしました。早速、青少年指導者協議会は、無線奉仕団に対して、トレセンでの実技指導を依頼し、良い形での連携が実現しました。また、私たち賛助奉仕団にとっても、この協議会が契機となり、青少年赤十字指導者協議会、みづうみ赤十字奉仕団との合同の「本庄小学校いとすぎ見学会」（6月27日）が実現したり、みづうみ赤十字奉仕団との共同開催の「高尾小学校の児童による落語鑑賞会」（11月12日）が実現することとなりました。

今年の「リーダーシップ・トレーニング・センター」には、贊助奉仕団から4名が参加し、お手伝いをしました。指導にあたられた島根県青少年赤十字指導者協議会の先生から、ご寄稿いただきました。

## 三日間の生徒の成長を支えて

島根県青少年赤十字指導者協議会 幹事 春日謙一

(島根県立浜田養護学校 教諭)

令和元年のリーダーシップ・トレーニング・センターが8月6日から8日まで、今年もサンレイクでおこなわれました。私に任された主な仕事は、初日の「アイスブレイク」、二日目のオリエンテーリングの「絵伝令」(伝言ゲームのお絵かき版)、そして「タペの集い」の主担当でした。以下、3つの取り組みについて感じたことを書かせていただきます。

まず「アイスブレイク」は自分の出身校ごとに、壁に東西南北のカードを貼っておいて、ホールを地図に見立てて座る「人間地図」をしました。しかし、私の児童生徒の実態把握が甘く、児童生徒が情報を交換し合って地図のように並ぶことはできませんでした。

言語活動を通してお互いの情報を交換して、目的を果たすことを求ることは、初対面の児童生徒にとって難しかったようです。北脇先生がおこなった「退化ジャンケン」のようなゲームの方が盛り上がり、アイスブレイクとして適切だと感じました。



次に「絵伝令」ですが、小学校4年生から高校3年生までの児童生徒が、1時間の間に80枚の絵を順番に描きます。今年は青少年赤十字賛助奉仕団の方2名に手伝っていただきましたので、5人チームで指導体制が充実しました。おかげで制作補助から、1枚1枚を順番通りに並べる作業、展示まで余裕をもっておこなうことができました。

児童生徒たちは結果発表のとき、ホールの壁に

貼り出してある自分やホームルームの作品の出来栄えを興味津々に見ていました。視覚情報の伝達ゲームから生まれた作品ではあるのですが、児童生徒の発達段階や個性、よりよく表現したい気持ちが伝わってきて、造形活動のよさを児童生徒もスタッフも感じていました。



三つ目は「タペの集い」です。その日の技術研修で、それぞれ学んだことを児童生徒にステージで発表してもらい、皆で学んだことを共有しました。発表方法はクイズにしたり、早く風呂敷でリュックを作る競争をしたり、パワーポイントを使ったりと、それぞれのグループが工夫を凝らしたものでした。最初のアイスブレイクは失敗しましたが、タペの集いはその分を取り戻すくらい、児童生徒一体となって盛り上がり安心しました。この技術研修で気づいたことを、どのように発表するか考え、表現することが、児童生徒の「気づき」「考え」「実行する」態度を高めると考えています。

リーダーシップ・トレーニング・センターは赤十字の精神を学ぶことを通じて、「気づき」「考え」「実行する」ことを児童生徒が学べる貴重な機会です。今後この教育プログラムが拡がっていくために、さらに青少年赤十字賛助奉仕団の皆様の力を貸していただきたいと、切に願っております。

# 糸杉の見学を通じて

中澤 悅子

6月27日に、青少年赤十字指導者協議会、みずうみ赤十字奉仕団の皆様方とともに本庄小学校の糸杉を見学に行きました。

最初に教頭先生から「紅梅・糸杉の歴史」のパンフレットをいただき、説明を受けました。ソルフェリーノの丘の糸杉の種を受け取られた本田坦氏からも、当時の様子を詳しく聴きました。

雨降りの日でしたが、校舎を出て、昭和40年に植えられ、30メートル以上になった糸杉を見上げました。ソルフェリーノの丘の糸杉の種が本庄小学校で育ち、半世紀以上の歳月を経ていることに感慨もひとしおでした。

ここに赤十字精神がしっかりと根づいている証でもあるように思います。大きく育った糸杉に見守られている子供達に、「どんな状況や困難があっても、大きく逞しく育てよ！」と励ましを与えていたようにも思われました。

島根県内に、全国・全世界に糸杉（赤十字のシンボル・シンボルツリー）が育って、アンリ・デュナンの思いが広がり、世界が平和になって欲しいと願いました。

今回の糸杉の見学を通じて、私自身が赤十字精神を心に秘めて、日々小さなことにも情熱をもって行動していきたいと強く思いました。心より感謝いたします。



本庄小学校の糸杉



島根県庁にも、ソルフェリーノの丘の糸杉が育っています。

## 青少年赤十字加盟登録式に立ち会って

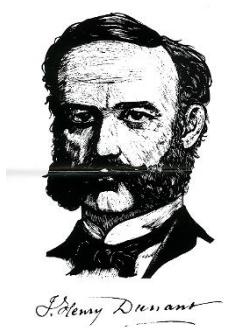
出雲市立湖陵中学校  
出雲市立河南中学校

広原 啓視

4月26日（金）午前、出雲市立湖陵中学校体育館で行われた青少年赤十字加盟登録式に、日赤島根県支部の小林主事と2人で参加しました。初めに、小林主事から赤十字や青少年赤十字についての基本的な話がありました。パワーポイントを使い、クイズなども取り入れた話は簡潔で非常に分かりやすいものでした。そのあと、私の方から、理想を実現するには志を同じくする仲間の存在が必要なことを、「5人委員会」を例にして述べさせてもらいました。

同じ日の午後、出雲市立河南中学校の加盟登録式には、日赤島根県支部の飯塚課長と一緒に参加しました。短時間の登録式でしたが、飯塚課長の話もまた簡潔で分かりやすく、私にとって大変参考になりました。式の終わりに、私は生徒会代表の胸にJRCのマークを取り付け、握手をしましたが、私の手を握り返す彼の強い力と誇らしい顔が強く印象に残りました。

両校の校長先生の話によると、両校ともに、生徒たちは地域でのボランティア活動に、積極的に、また自発的に参加しているとのことでした。また、加盟登録式の当日は、私たちに大きな声で挨拶をするなど、マナーもすばらしいと思いました。青少年赤十字の実践目標や態度目標が学校教育に活かされていることを実感しました。



安来市立第三中学校  
安来市立広瀬中学校

金崎 智枝

4月22日に安来三中、5月27日に広瀬中の青少年赤十字加盟登録式に、日赤島根県支部の小林主事に同行して伺いました。両校ともJRCの精神を生かした活動を継続しておられ、夏休みに実施されるトレセンにも毎年多数の生徒さんが参加しておられる学校です。

安来三中では、全校生徒が互いの顔が見えるようにコの字になって座り、小林主事のアンリ・デュナンや赤十字、世界の状況などについてのプレゼンテーションに耳を傾けました。私からは、赤十字の原則の“公平”を取り上げ、困っている人にはより多くの支援が必要であることをお話ししました。安来三中は継続的に防災教育に取り組んでおられ、生徒の活動が地域に広がり、地域の防災意識の向上につながっていると聞いています。

広瀬中では、小林主事のご指導のもと、未熟ながら私がプレゼンテーションを担当させていただきました。赤十字の話に加え、私がカンボジアで見てきた汚染された水を飲まざるを得ない子ども達の話もしました。広瀬中では、夏休みの三日月公園の清掃作業や募金活動を、生徒会の活動として継続されているそうです。また生徒集会で、夏休みのトレセンに参加した生徒からの研修報告もあったとのことです。



## 新入会員

# JRCとの出会い

立花 久紀

今春、出雲市立遙堪小学校を最後に退職しました。38年の教員生活の中の25年をJRCに関わらせていただきました。

私が青少年赤十字指導者協議会の一員となつたのは平成6年でした。この年に大社小学校に赴任し、池田英雄校長先生と出会いました。ある日、池田先生から「全国指導者研修会に参加してほしい」とのお話をいただきました。当初参加予定だった方が都合で行けなくなり、私に話が回ってきたのでした。このお話がなければ、私がJRCと関わることはなかつたでしょう。そういう意味では、JRCとの不思議な縁を感じます。

移動も含め6日間の長い研修会。周りは知らない人ばかりで緊張の連続でした。それでも、様々な活動を通してホームルームの人と徐々に話すことができるようになりました。特に関西や

九州の方の積極性には学ぶべきことがたくさんありました。そして、この研修で学んだJRCの理念やトレセンのプログラムは、その後の私の学級づくり、管理職としての学校経営に役立ちました。

その後赴任した学校でも、管理職の理解があり、夏のトレセンにほぼ毎年参加しました。参加する子ども達との出会いが楽しみでしたし、私が研修で学んだ「リーダーとしてどう行動したらよいか」を子ども達に考えてほしいと思っていました。

現在、私は「海辺の多伎図書館」の館長をしています。図書館経営は全くの素人ですが、JRCの態度目標「気づき、考え、実行する」を大切にし、利用者の方に喜んでもらえる図書館づくりを進めていきたいと思っています。

## 編 集 後 記

お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様に、厚くお礼申し上げます。

第28号は、青少年赤十字指導者協議会からのご寄稿、みずうみ赤十字奉仕団と合同の糸杉見学会や「日赤島根県支部赤十字奉仕団委員長協議会」の報告などを通して、他の団体とのつながりが感じられる号となりました。これからも多方

面からの情報を共有し、「いとすぎ」が活動の広がりのきっかけとなれば幸いです  
各地の台風被害に心が痛みます。寒さに向かうこの季節、皆様どうぞ健やかにお過ごしください。

金崎 智枝

## 編集委員

岩井 元康  
金崎 智枝  
川津 愛子  
中澤 悅子  
花田 紀美江  
広原 啓視



台風19号被災地への義援金